

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：33801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02642

研究課題名(和文) 幼児教育における 循環成長型 アートプログラムの開発と実践

研究課題名(英文) The development and application of "The Circulatory Growth Art Program" for early childhood education

研究代表者

村上 誠 (MURAKAMI, Makoto)

常葉大学・健康プロデュース学部・教授

研究者番号：30331606

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：幼児期のアートの活動は“生きる営み”であり、絶えず変容を内在させつつ循環する。変容は成長の表れでもあり、本研究では幼児の活動を 循環し成長する ものと理解し、作品という一点に留め置かれない活動を『循環成長型アートプログラム』と名づけた。そして3つの観点、 素材との出会い 手法との出会い テーマとの出会いを設定してプログラムの開発と実践を試みた。実践を通して、これまでのような<絵画><造形>という美術の範疇、また幼児教育に重要なものは「音楽・図工・体育」であるという既成概念にとらわれていては、幼児本来の遊びと学びが成立しにくくなってしまふことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで幼児教育で重要とされてきた「音楽・図工・体育」という領域分けを越えるアートプログラムを開発した。幼児の活動は“生きる営み”そのものであり、それは絶えず変容を内在させつつ循環し成長する。ここで提示したものは、小学校以降の「教科教育」とは異なる、子どもの生活に根ざした活動であり、その形態は 型とか 方式 という枠組みをも溶解させるものが望ましい。

研究成果の概要(英文)：Art activities in early childhood are "activities for living", and these activities for living are constantly circulating along with internal transformations. Transformations are also a sign of growth. In this study, we regard the activities of young children as "circulating and growing", and we called these activities "circulatory growth art program", which were not limited to just activities for producing art works. Then, we tried to develop and apply the program by setting three viewpoints: (i) experiences with materials, (ii) experiences with methods, and (iii) experiences with themes. Through the application, it was shown that if we adhere to only traditional art categories such as painting or crafts, or adhere to the preconceived notion that music, art and physical education are important for early childhood education, then the kind of playing and learning which is inherent for young children will hardly be established.

研究分野：幼児のアート教育

キーワード：幼児教育 アート教育 循環成長型アートプログラム

1. 研究開始当初の背景

これまで〈人間と環境〉をテーマにアートの活動と著作の発表を続けてきた。これは、人間がどのような必然性をもって自分たちの環境を創出、維持し、時に破壊してきたのかを問うことでもあった。1988年から人間の初源の住居を国内外で制作し、公開。2003年からは、時間の経過とともに自然に還っていく庭を設計、同時に人間の原初の姿を見せる幼児との生活の中で、彼らと一緒に遊びの空間としての庭を創った。それらの活動は、人間の視覚的環境を問うこととなり、それと並行して子どもたちとのアートワークを試みた。制作物は自然倒壊及び解体・消滅させ、目撃者の記憶にだけ残された。人間の営為を、発生から生の最中へ移り、消滅への流れとして捉え、そのプロセス全体を〈循環〉するアートとして提示した。

2012年からは、基盤研究(C)『ケアとしての保育環境の創出』の中で、環境を保育空間に絞り、幼児がどのような保育空間を望むのかをアートワークを通して調査。そこで明らかになったことは、幼児の場の生成は、出来上がった時点で完成ではなく、そこで遊ぶことで壊れ・消滅し、そのことで次のステージに進む。つまり、幼児は自らの環境を創り出す。彼らは、このようにダイナミックな活動を日々行っているのであり、その〈生と死、再生〉と呼ぶべき成長の過程を、私たちは丁寧に考え直さなければならないと考えた。

2. 研究の目的

本研究のテーマである「循環成長型アートプログラム」は、アートを通して幼児教育における生活と教育の全体性の回復、及びその具体的な実践例を示すことにある。海外で体験した幼児教育におけるアート、特にドイツと北欧においては、発達の視点が最重要とされており、現場では〈作品〉という発想は無い。また近年大きな注目を集めているレジオ・エミリアの幼児教育は魅力的であるが、この方法は正統派から取り組まれてきたプロジェクト・メソッドと重なる。一つのアプローチとして新奇性のみが部分的に取り入れられることへの危惧はすでに指摘されており、教育の質は「常に生みだし続ける営みの中においてこそ生まれる」のであり、教育の質をそれぞれの国や「地域の歴史文化や思想哲学の中で位置づけていくこと¹⁾」の重要性が求められている²⁾。つまり、〈保育〉という大きな流れの中で岐路に立たされている幼児〈教育〉、中でも図画工作（アート教育）の明確な役割と今後の具体的な展望を示すことを目的とした。

「フレーベルは認識と行為との直接的な循環関係」を主張したが、本研究ではそこから進めて、循環は成長を伴うものであるという結果を導き出すと考えている。その時に、言語・身体・音・美術を含んだアートの活動は大きな可能性を秘めたものとなる。狭義には、我が国の幼児教育現場の課題となっている「絵画・造形」という言葉の在り様、及び「作品作り」としての教育技術を相対化し、幼稚園教育要領にあるような“**かいたり、つくったり**”という、幼児の本来の遊びを回復させる。また、理論と並行した実践的なアートプログラムの開発によって、幼児教育の現場に新たな教育実践の具体例を示す。広義には、子どものアートの活動を“生きる営み”として捉え直すことで、循環する人間の営為を単純なくり返しに留めず、特に幼児の場合には、そこに明確な成長のベクトルを含ませる。そのことで、幼児の活動があたかも終了し完成したかのように見える、〈作品〉という“ある一点”に留め置かれることのない、人間の生きる方途としての表現活動を再確認するための研究と実践になる。

3. 研究の方法

本研究では、研究における1から3のステージを想定した。

■研究1：〈循環と成長〉の考察（文献と調査研究）

〈循環〉は **circulation, cycle**、つまり一回りして元の場所や状態に帰り、それをくり返すことである。子どもたちの活動は“生きる営み”としてくり返されるが、それは同じことのくり返しではなく、〈成長〉という方向性が伴う。子どもの“生きる営み”と宗教学・民族学のいう〈再生〉との関わりを考察する。

■研究2：アートプログラムの開発と実践

幼児の生活全体（言語・身体・音・美術）を視野に入れ、作品作りに捉われないプログラムを開発

し、幼児教育の現場で実践する。開発の枠組は、㊤素材との出会い（素材と身体性）、㊤手法との出会い（新しいメディアを含め）、㊤テーマとの出会い（プロジェクト・アプローチ）であり、この3つの動きが重なったり離れたりしながら進行する。プロセス全体を映像・写真・記述（ドキュメンテーション）することで、プログラムの様相を可視化してゆく。すべて子どもたちと教育者の協働作業であり、長期間継続的に取り組むため、プログラムそのものは変容を内在させながら絶えず新たな再生と発見がくり返されることになる。本研究の中心となるのは、ここでくり返される実践である。

■研究3：『循環成長型アートプログラム』の公表

研究2での知見を踏まえて、アートプログラムの実例をまとめ、公表する。学会発表だけでなく、展覧会を開催、インターネットや印刷物を通して、アートの手法を駆使した子どもたちと教育者の協働による活動、及び教育実践の具体例を示し、『循環成長型アートプログラム』をより具体的に顕在化させ、多くの教育現場に情報を提供する。

4. 研究成果

ここでは、研究の成果を年度ごとに区切って報告する。

1) 2018（平成30）年度

本研究の初年度は、研究1と2を中心に進め、研究3は試行的な実施に留めた。〈循環と成長〉の考察では、〈循環の島〉を謳う沖縄の宮古諸島で「ヒトの生活と循環」をフィールドワークし、主に水と人の生活の循環を取材した。また、宮古本島で斬新な教育環境を構築し保育を続けるHこども園を訪問し、子どもたちの生活を体感した。いずれも島の文化そのものが“生と死”の豊かな循環の中に存在していることが確認できた。研究2では、3つのテーマ（㊤素材 ㊤手法 ㊤テーマ）での実践を試みた。㊤素材：すでに2015年から「素材との出会い」をテーマにした多くの実践を続けてきたが、それに加えて、2019年3月15日と16日に幼児と保護者を対象として、身近な素材で遊ぶ実践とレクチャーを行った（東京都府中市）。時期は前後するが、㊤手法：2018年7月4日に20組の親子を対象に「親子で描く遊び」（浜松市）、7月14日に、ブルーノ・ムナーリの芸術教育論に基づいた小学校低学年対象の「見えそうで見えない不思議な絵本作り」（浜松市）、9月19日に保育者対象のアートワークショップ「色で遊ぶ」（浜松市）を実践。㊤テーマ：すでにこれまで3年間実践を続けてきた島田市のY保育園で1年間を通したアートの遊びを実践し、2019年1月17日と18日に記録展示会『あそびが、育つ』を開催し、保育実践の可視化を試み、保護者と保育者を対象にした説明会も実施した。この年度は、研究1と2が主な活動となり、研究3はホームページの試行的な製作に留めた。

2) 2019（平成31・令和1）年度

2年目は、研究2のアートプログラムの開発と実践を主に取り組んだ。まず6月に、18組の親子と身近な素材（廃材）を用いたアートワークショップ、7月に小学校低学年を対象にしたトレーシングペーパーを使ったワークショップ、9月に幼児対象のトレペを使ったワークショップを行い、12月には、再度18組の親子を対象に身近な素材でワークショップを行った。11月から2020年1月までは、研究協力園であるY保育園でほぼ毎週アートの活動を実施したが、ここでは、アートの枠組みを超えて、生活と創作活動が一体となった実践を試みた。その成果をまとめ、2020年1月24日・25日にドキュメンテーションを園内に展示し、『こどもと楽しむ造形活動』として園児と保護者がいっしょになって制作する活動を実施、同時に保護者への説明会と当該福祉法人職員を対象にした研修会を実施した。また、前年（2019年）7月の小学生対象のワークショップの詳細は勤務校紀要に論文として発表した。研3では、『循環成長型アートプログラム』について、2019年7月に浜松市私立幼稚園協会主催の研修会で「教育を“構想”することの楽しさと難しさ」をテーマに講演、11月には浜松市こども家庭部主催で「子どもの表現」について講演を行った。

3) 2020（令和2）年度

最終年度は、研究3の『循環成長型アートプログラム』の公表を中心に進める予定だったが、コロナ禍の最中に入り込んでしまった。公表は、以下の2つの方法で進める予定であった。1つが、展覧会として『あそびが、育つ。（循環成長型アートプログラム、その実践記録 2003～2019）』展、2つ目が実践記録集『あそびが、育つ。』の出版、である。展覧会は10月に予定していたが、

延期せざるを得なくなった。すでにマケット（会場模型）まで作り、展示する写真や映像の準備を進めていたが、小さな保育園に部外者が多数入り込むことは現実的ではなかった。そのため、実践記録集の出版に多くの時間を割き、年度内になんとか印刷を終え、実践協力者と幼児教育・保育関係の各機関に配布することができた。展覧会については、研究協力園の強い要望もあり、コロナが治まった後、これまでの実践に最新のデータを加え、2022年度に開催したいと考えている。

このような厳しい状況の中でも子どもたちの創造的な生活と活動は遅しく続いた。夏から冬にかけての研究協力園での実践「お茶を、楽しむ」が園と子どもたち、そして保護者とのコラボレーションによって実現した（→）。この実践はお茶どころS市の地域性を取り入れ、同時に保育の中に保護者を呼び込んだことにおいて、今後の新たな展開につながる可能性を示した。

展覧会は延期になったが、インターネットを通じて展示のマケット（→）を公開できたこと、また年度内に、3つの保育者を対象にした実践「新しいアートの実践」（浜松市こども家庭部主催）と研究保育「身近な素材の再発見」（浜松福祉会主催）、研究保育「保育をする“わたし”を見つめる」（れんりこども園主催）が三密対策を徹底して実施できたことを、最後に記しておきたい。



i 秋田喜代美「レッジョ・エミリアに学ぶ保育の質」『子ども学・1号』p-26

ii //

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 村上 誠	4. 巻 14
2. 論文標題 ブルーノ・ムナーリの手法によるアートワークショップ～循環成長型アートプログラムの方法と実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 常葉大学健康プロデュース学部雑誌	6. 最初と最後の頁 103-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村上 誠	4. 巻 13
2. 論文標題 循環成長型アートプログラムの方法と実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 常葉大学健康プロデュース学部雑誌	6. 最初と最後の頁 125-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村上 誠
2. 発表標題 “構想法”による遊びの発生と展開、その1年間の記録 - 循環成長型アートプログラムの方法と実践
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 村上 誠	4. 発行年 2021年
2. 出版社 こどもスタジオ出版	5. 総ページ数 64
3. 書名 あそびが、育つ。 - 循環成長型アートプログラム、その実践記録2003-2019	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------